

編集後記

東亜同文書院大学記念センターが毎年刊行する『記念報』も今回で Vol.27 となる。

今回は、湯山英子「東亜同文書院生が見た日中戦争初期の仏領インドシナ」、武井義和「孫文支援者であった山田純三郎の戦前から戦後における日中関係観とアジア観」、三好「東亜同文書院調査報告書再読」試論の3本の論文、千賀新三郎「国際連盟東亜同文書院学生支部小史」の研究ノートを中心に、資料紹介など通例の内容を加えて刊行する。3本の論文、そして1本の研究ノートに共通するのは、世界情勢とそこに付随する日中関係が不穏な状況下での同文書院のありようである。アジアへ、中国へと思いを羽ばたかせようとした当時の若者が一体何をみたのか、旧来の「友好」「支援」と緊迫する国際関係を、それぞれの「国益」とどのようにつじつまを合わせるのか、悩ましい問題に直面していたのである。その根底には、いうまでもなくアジア主義というアモルファスな思潮が流れている。

また、愛知大学創設期の状況について、坂井達朗氏のお話を掲載することができた。特に、まさしく困難な時期の林毅陸初代学長について、その為人を含め知ることは、大学が転換を迫られている現在、振り返るべき原点であろう。

今年度の活動で特筆すべきことは、昨2018年6月29日～7月1日、愛知県岡崎での展示会・講演会であった。詳細は講演録に譲るが、なかでも特に紹介しておきたいことを二、三記したい。

展示会は記念センター所蔵の資料を通して、東亜同文書院の歴史が21世紀につながるものであり、愛知大学に継承されていることを地元の方々へ紹介することを兼ねている。会場は岡崎市図書館交流プラザ **Libra** をお借りし、上の階では「内田修ジャズ・コレクション」があるなど、不思議なマッチングをしていた。そう言えば、東亜同文書院があった上海は、日本に一番近い「西洋」として、日本の若者達の憧れの地の1つであり、ジャズに「はまった」若者も多かったというから、何かの縁かも知れない。

さて、講演会では藤田・石田両氏による学術的なものの後、2人の若者が順番に壇上に立った。恐らくは、生まれて初めて、不特定多数の前で話をしたのではないだろうか。これまでの講演会とは趣向を変えてみたのである。2人の若者には、自分の経験をありのままに話してほしい、と事前に頼んでおいた。さほど難しい注文でもないように思えるが、今どきの若者であっても、やはり若干は緊張したようであった。しかしながら、会場からの暖かい反応に、しだいに堅さもとれ、楽しげに自分の学生時代、インターンシップ等の中国現地体験を回想していたのが印象的であった。

彼らは愛知大学現代中国学部の若いOBと現役4年生。ご承知のように、東亜同文書院の理念を蘇らせようと、その後継大学をもって任ずる愛知大学が、1997年に設置した学部が現代中国学部である。中国研究においては以前から定評のあった愛知大学ではあるが、さらに大学教育の場においても中国を総合的に把握しようという試みであった。これが、書院

の理念の再現であった。現代中国学部では、当初から「現地主義」をモットーに、いまでは多くの大学で行われている全員留学の嚆矢となった「現地プログラム」、中国社会に飛び込む「現地研究調査」、そして中国で行う就業体験「現地インターンシップ」を実施し、すでに 20 年以上の歴史を持つに到った。彼らには、入学時最初の必修科目として「入門ゼミ」があり、そこで東亜同文書院との結びつきを学ぶ。愛大の一員となることは、書院 45 年と愛大 72 年の 117 年の大学史と結びつくことになる。そして、現地中国での体験を通して更なる出会いを重ねて行く。その成果は、これまでも毎年の報告書などで公にされてきたし、書院・愛大 OB・OG の方々が中国で行われる「現地研究調査報告会」に参加して下さっていた。それを昨年、本センターの定例活動である展示会・講演会の一環に組み込んだのである。

2019 年 3 月 31 日

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長 三好 章